

JSOG Newsletter

Reason for your choice

No.3
JANUARY
2009

わたしたちの医療は「新しい生命」を生み出すためのものです。ひとつでも多くの生命の誕生のために。すべての女性のために。いま、わたしたちができることを...

社団法人 日本産科婦人科学会
JAPAN SOCIETY OF OBSTETRICS AND GYNECOLOGY



第2回産婦人科サマースクール2008 in美ヶ原

THE 2ND OBSTETRICS AND GYNECOLOGY SUMMER SCHOOL 2008 IN UTSUKUSHIGAHARA

昨年好評を博したサマースクール。今年から産科婦人科学会の正式行事となり、長野県美ヶ原で開催されました。昨年の参加者で、初期研修2年目の先生方の動向を調査すると、高率に産婦人科を専攻していることから、将来の日本の産婦人科にとって大変重要な企画であり、このような大学を越えた輪が広がることは、大きな意義を感じました。

定員を超える応募が殺到

昨年の参加者が86名だったため、当初募集定員を100としていましたが、全国からそれを超える多くの応募があり、急遽ホテルと交渉し、会場を増設、ホテルの宿泊のキャンセルは全てサマースクールで確保し、なんと174名の参加者を迎えることができました。

開催にあたり1台2000万円する超音波シミュレーターをイスラエルから3台空輸、最新の超音波機器を8台、内視鏡のブラックボックスを10台、外科縫合器を10台、1台2000万円する内視鏡シミュレーターを2台、シャウカステン8台を用意しました。

プログラム開始

1日目のプログラムは昨年の参加者アンケートで要望が多かった「産科医療訴訟に対する対策」として無過失医療保障制度について昭和大学の岡井先生に、「急増する産婦人科女性医師」をテーマとして都立府中病院の桑江先生と日本医師会から保坂先生にそれぞれご講演を頂きました。

次いで、実技演習として「産科超音波」と「婦人科画像セミナー」を行い、クイズ形式で行われた「症例検討会」は実際の臨床症例を模擬体験でき、参加者も熱心に取り組んでいました。チェックイン後に行われた合同ディナーは、参加者同士の交歓を活発にするために立食形式としました。思惑通り、初めて顔を合

わす参加者間での会話がはずんでいるようでした。

その後の「自由討論」とプログラムに書かれた二次会はいわゆる飲み会ですが、サマースクールのメインイベントといってもよく、これから産婦人科を専攻しようかどうか迷っている参加者に、若手産婦人科医や、産科婦人科学会と産婦人科医会の幹事が産婦人科の魅力や語り、参加者からの産婦人科に対する質問に答えていました。

お酒も入って大いに盛り上がり、参加者の連帯感も生まれたと思います。吉村理事長も午前3時までお付き合いいただきました。

2日目は、内視鏡下でゴムの小さな輪を移動するゲームを行ない、勝者にはシミュレーターで止血操作を行なってもらいました。

敗者復活戦も行ない、ほぼ全員の参加者がシミュレーターを操作できたと思います。全員が産婦人科医になった気持ちで、真剣に実技を行なっていました。

若手医師と本音で語り合う

最後はワークショップ「若手医師と本音で語り合う」です。若手の先生方に加えて、昨年JSOGに参加した先生方も加わり、「待遇改善が

なされているのか?」「どのような研修病院が良いのか?」「医療訴訟は大丈夫なのか?」「人工妊娠中絶は行なわなければならないのか?」等、参加者の生の声に、若手医師の視点で答えました。

次回開催

来年8月8日・9日を予定しています。たくさんの方に参加していただき、1人でも多く産婦人科医になってもらえるようなセミナーにしたいと思います。

スクール参加者の声 (ここで紹介しているものは抜粋であり、ほんの一部です。全文はWEBサイトに掲載されていますので、ぜひご覧ください。)

特に興味を引いたのは「無過失医療補償制度」についてで、非常に勉強になりました。内視鏡・超音波実技セミナーは普段の臨床の場では体験できないような貴重な経験ができ、しかも一からご指導していただき大変有意なものでした。

夜には全国から参加した「仲間」や全国各地の先生方との出会いがあり、遅くまで将来について語り合い、さまざまな刺激を受け、同じような不安を共有し、少し安堵感を覚えたりと、とても貴重な時間でした。

今回、大学受験を共に励んだ友人に8年ぶりに再会し、さらには同じ道を志していることは嬉しいもので、今後の励みになりそうです。

【初期研修医1年目】渡邊理史

昨年に続き2回目の参加ですが、思い出せば出すほど、もう一度行きたいと言う思いに駆られます。

講義や実習内容が特に魅力的であったように感じます。中でも、超音波と画像診断の講義および実習が印象に残っています。

また、他の大学や病院の研修医や学生とも交流ができ、今後につながる貴重な経験、考え方を得ることができました。

昨年と同様に参加者の大多数がやはり女性であったことは、心強くもあり不思議な感じでもありましたが、産婦人科は同性からしても、魅力的なのだ、ということ改めて感じました。

【初期研修医2年目】立石聖子

初めての参加です。研修医として産婦人科をローテーションしている際に、去年参加された先生からの感想を聞いたのがきっかけでした。

全国から同じ志を持った同年代の仲間が集まり、寝食を共にし、様々な勉強を出来ると聞きました。

結論としては、皆が同じような悩みや不安を抱えても尚、目指すことに使命感の様なものを抱いていました。そのことに、はっきりと共感できたと言えば語弊があるかも知れませんが、講義の数々により現実味を帯びてきたことは確かです。

ご飯も美味しく、美ヶ原という非現実の土地に行けることで日頃のストレスも癒され、参加させていただいた教授を初め、医局の先生方に本当に感謝しています。先輩方が私に勧められた様に、私も実感を持って後輩に勧められると思います。

【初期研修医2年目】力富真惟子

それぞれの先生が、これまでの経験をもとに「本音」でお話くださり、産婦人科医としての具体像が描けたように思います。

現在、マスコミや医療の現場では「絶滅危惧種」「激務」「訴訟」など、進路として産婦人科を決意するにはハードルが高くなるような言葉が飛び交っています。しかし産婦人科は子供の誕生に立ち会い、また女性のライフサイクルと密接に関わる素晴らしい仕事だと思います。私は研修で産科を回りましたが、前日までエコーで見ていた赤ちゃんが、この世界に誕生し目の前で元気に泣いている姿は、とても神秘的でした。赤ちゃ

んとお母さんが対面する瞬間は、いつも胸が熱くなりました。ただし、子宮内胎児死亡や悪性腫瘍など、つらい事に向き合わなければならないのも事実です。そのような患者さんのケアや治療をすることは、チャレンジではありますが、産婦人科の魅力の一つだと考えています。そして、私が産婦人科に惹かれる大きな理由の一つは、働いている先生方がとても楽しそうに活き活きと仕事をしていらっしゃる事です。今回お世話になった全国の産婦人科の先生方のお話を聞いて、ますますそう感じました。

【初期研修医1年目】H. K.

Welcome to 日産婦学術講演会 in KYOTO 2009

プログラム速報

来春、4月3日から3日間にわたり国立京都国際会館にて第61回日産婦学術講演会が開催されます。現在、全国より登録された1200題以上にわたる一般演題の選考課程に入りました。ここに、開催されるプログラムの内容を一部お伝えしましょう。

前日(4月2日)は、国際交流の一環として、日本と海外の若手産婦人科医師によるinternational seminar for junior fellowsを開催、残念ながらclosed meetingのため、一般の参加は翌日からとなります。

開会式後よりクリニカルカンファレンスが始められます。内容は医学部の講義でもおなじみのup-to-dateな知見を交えた疾患の解説です。

午後からは集会のサブタイトルでもある「そだて若き指導医たち」を企画。

現在、日本産科婦人科学会では5年以上の臨床研修と専門医認定試験で産婦人科専門医を認定していますが、その他でも、さまざまな分野で専門医制度が発足しています。

そこで、産婦人科診療ともっとも関連のある専門医制度委員会の先生方に情報を提供していただき、これらのサブスペシャリティと、これからの産婦人科診療のあり方について、熱いdiscussionを繰り広げていた

だきたいと考えています。引き続き、若手医師による学術企画「あなたは どうしますか? 新たな労働環境を求めて」を開催、臨床最前線で奮闘されている若い先生方の斬新な発表を計画しています。

引き続き、クリニカルカンファレンスを開催します。

生涯教育プログラムと題し、実際の臨床現場で発生する様々な問題について解説をお願いしています。

内容は、「胎児機能不全への対応、産科救急への対応、術中合併症への対応、新生児蘇生法、産科超音波診断、米国における産婦人科をとりまく医療環境」です。

午後からは産婦人科ガイドライン(産科編)の解説を予定しています。テキストから離れ、産婦人科診療の実際を体験してみてください。

3日間にわたり会場では昼食をとりながらのランチセミナーと午後からイベントホールで一般演題をポスターで発表いただきます。

事前に高い評価を受けた演題は、会場内にポスターを展示するとともに口演として発表いただく予定です。

是非、職場の諸先輩方の発表にご参加ください。

初日、各国のエキスパートも含む、多くの聴衆が詰め掛けるなか、台湾、韓国、

等、盛大かつ厳かに執り行われ、参加した。若手医師たちが壇上に上がり英語で自己紹介を行うと



2008年に参加したプログラム

- TAOG 2008年台湾産婦人科学会年次学術集会 2008年3月15日~17日【5名】
- ACOG 第56回米国産婦人科学会 2008年5月3日~7日【10名】
- SOGC 第64回カナダ産科婦人科学会 2008年6月25日~29日【3名】

は、産婦人科医のみならず家庭医、看護師、助産師、関連保険専門家3000名以上の会

TAOG

2008年
台湾産婦人科学会
年次学術集会

若手医師交流プログラム

2008年に行われた、産婦人科医教育成奨学基金制度による海外研修派遣について紹介します。

日本の若手医師たちが、チームごとに研究や臨床統計、経験した症例に関して英語で発表と質疑応答。座長も若手の医師によって執り行われました。

それぞれの国の観点から討論。各テーブルそれぞれ分野で熱心な意見交換が行われ、約2時間の討議もあっという間に終了しました。

SOGC

第64回
カナダ産科婦人科学会

海外からの参加者が発表を行うセッションでは、日本チームも発表、前日の作戦会議で、ジョークを交えながら明るく発表すること

【学術講演会参加費優待】※学生証、証明書をご提示下さい。
★医学生→無料 ★初期研修医→3,000円



このような世界基準を肌で感じ取った日本若手医師たちが、今後の活動を通して日本発の世界基準を創造していくことを期待します。

産婦人科専門医制度について

産婦人科専門医制度とは...

産婦人科専門医制度は、「産婦人科領域における高い知識、練磨された技能と高い倫理性を備えた産婦人科医師を養成し、生涯にわたる研修を推進することにより、産婦人科医療の水準を高めて、国民の福祉に貢献すること」を目的として、日本産科婦人科学会によって運営されています。

50例、および、症例記録10例の提出が専門医認定申請時に必要です。症例レポートの記載内容も評価されます。

試験の概略

(1) 二次審査
申請者が上記の申請条件を満たしているかどうか、各都道府県にある専門医制度地方委員会において書類審査が行われます。

取得を目指す医師は、本学会が発行する「産婦人科研修手帳」を持って研修を行います。

受験のための準備

(2) 二次審査
毎年、概ね7月下旬の土曜日と日曜日の2日間、東京および大阪の二会場にて行われ、受験者が専門医を標榜するに相応しい知識、態度、技能を有しているかどうかの評価されます。

この研修手帳にしたがって、指導医と相談しながら、バランスのとれた研修を行う必要があります。

【1日目 筆記試験】午後3時間かけて筆記試験が行われます。マークシート方式で、周産期、生殖医学、婦人科腫瘍、女性のヘルスケアの4分野から合計120問出題されます。

【2日目 面接試験】1人の受験者に対して、3人の面接試験官が20分間行ないます。予め提示された症例について、「受験者が医師役」、「面接試験担当者が患者および家族役」となってロールプレイを行い、医師役の受験者に疾患の概要や治療方針等について説明してもらい、治療選択のインフォームド・コンセントを実施します。なお、研修手帳や

また、取得に必要な知識については、学会が発行する「産婦人科研修の必修知識2007」にまとめられています。筆記試験の例題も掲載されているので、ぜひ活用してください。